

ヴァイオリニストTAIRIKUの戯言

〔第8回〕

『弦が揺れると、僕は季節の風になる』

+ 文 佐田大陸 Text by Tairiku Sada +

新しい挑戦

ヴァイオリニストの古澤巖さんと福田悠一郎さん、チェリストの高木慶太さんとカルテットを結成しました。3月は7公演行い、東京、大阪、名古屋、群馬、と色々な所に行かせて頂きました。古澤さんは最近某テレビで「素」が暴かれていましたが、むしろ素顔の方が魅力に溢れている方です。

古澤さんとの出会いはとあるスポーツジムのお風呂でした。

運動を終えてお風呂場に行くと、その日は珍しくガランとしていて、いつも賑わっているシャワー室には人影一つありません。奥の大きな浴場に行くと、背もたれに寄りかかった人が1人、こちらを鋭い眼光で見っていました。僕は遠目に即座に思いました。僕は「あれは間違いない!! 古澤巖さんか、竹中直人さんだ!」

どちらか確証が持てなかったたので、お風呂からあがるタイミングを見計らって、追跡しました。そしたらフロントで、古澤さんと発覚したので、自分の精算を終えて慌てて外に出ましたが、もうそこに姿はありませんでした。

それからTSUKEMENを結成し、数年が経ちました。その後、「徹子の部屋クラシック」という、徹子の部屋に出たクラシックのアーティストを集めたコンサートに出演する機会を頂きました。

その演奏会に古澤さんも出演されていて、古澤さんと初めて共演しました。

その時にたまたま持ち替えて演奏した僕のビオラを古澤さんが大絶賛してくださり、古澤さんが、「TAIRIKUのビオラでカルテットをやりたいんだけど、メンバーを集めてくれないかな」と仰ったので、僕がメンバーを集め、品川カルテットが出来上がりました。

品川カルテットの名前の由来ですが、東京クワルテットという、世界的に活躍をしていた世界最高峰のカルテットがありました。それとは別に、昔玉川カルテットというお笑い演芸グループもありました。

東京の手前なので品川、と僕の父が通りすがりに言い、メンバーは嫌がりましたが、古澤さんが一発で気に入って、それに決定。

どこかで聞いた流れですが……。

カルテットは、弦の音大生なら学生時代に経験します。オーケストラの最小形態であり、最も難しく、最も尊くやりがいがあるとされています。練習に練習を重ねて、全員の気持ちと音楽レベルが極めて高い水準で一致して初めて形になる。

実はとっても名曲が多いカルテット。しかし悲しいかな、お客さんが一番入らないのもカルテット。今カルテットだけで生活できているグループは日本でおそらく片手で足りると思います。

弾いている人達が一番幸せなのかもしれない存在、ビオラ。高音をヴァイオリン

に持っていかれ、低音をチェロにもっていかれ、残ったのはその中間のなんとも言えない音。しかし、独特で素晴らしい音のする楽器。ヴァイオリンが弾ければ大抵の人はビオラを弾くこと自体は出来ませんが、不思議とビオラという楽器は適性があります。どうやらありがたいことに僕には適性があるらしいので、ビオラをスターの花形楽器に押し上げるのが夢の一つです。

ビオラならではの曲は?と言われて一つも曲が思い浮かばないなんて悲しい事です!
作るゾー!!



profile

2010年3月に桐朋学園大学音楽学部大学院を修了。
2ヴァイオリンとピアノのアンサンブル・ユニット「TSUKEMEN」のヴァイオリニストでリーダー。
2010年キングレコードからメジャーデビュー。
結成9年目にして450本以上の公演を海外や日本全国各地で開催、現在までにのべ35万人を動員している。